

2021 年度 研究班 研究成果報告書

研究名	離島地域における大学の関わる授業実践の創出と実践、及び地域拠点の運営の在り方について
代表者名	盛口満
分野／対象地域	石垣島白保集落
研究期間	開始 2022 年 4 月 ～ 終了 2026 年 3 月 (1 年目 / 3 年間)
研究成果要約	今年度は、しらほこどもクラブと沖縄大学の教員養成過程の学生をオンラインでつなぎ、さらに数人のスタッフが現地へと赴くハイブリッド型の体験交流「やまんぐうキャンプ」を実施した。コロナ禍で直接的な交流が難しくなり、当初予定を大幅に変更することとなったが、結果的には離島での新しい環境教育の展開を見出せることとなった。
研究組織	(研究代表者及び研究分担者) 所員 2 名、 特別研究員 1 名、 計 3 名
研究成果 3,000 字程度 (別紙添付可)	別紙添付 ① 研究成果 ② 「Covid-19 パンデミック下における WWF サンゴ礁保護研究センター (しらほサンゴ村) における環境教育の実践」 盛口 満 ③ 募集チラシ
研究成果の 発表実績	「Covid-19 パンデミック下における WWF サンゴ礁保護研究センター (しらほサンゴ村) における環境教育の実践」 盛口 満

2021年 盛口班 成果報告

背景 ～「しらほサンゴ村」のWWFから白保公民館への移譲～

「しらほサンゴ村」は2000年春、石垣島白保の貴重なサンゴ礁を保全するためにWWFジャパン（世界自然保護基金）により、白保集落内に設置された。以後20年間、白保を中心とするサンゴ礁の保全調査活動を実施してきたが、2021年3月、白保公民館に移譲された。盛口班では2011年から10年間しらほサンゴ村を拠点にWWFジャパン、NPO夏花との協働事業として、白保集落の子ども達への自然教育・環境教育活動の実践を行ってきた。2021年3月の移譲後も、しらほサンゴ村を運営予定のNPO夏花（公民館より委託運営の予定）の意向でこれまでと同様、教育活動の実践に関わることとなっている。

しらほサンゴ村の白保公民館の移譲に当たっては、未確定な部分も多く、2021年度は、盛口班においてもどのようにしらほサンゴ村を運営・活動していくかについて一緒に考え、参加型のワークショップを実践する予定であった。しかし、コロナによる緊急事態宣言のため、現地でのワークショップの実施が難しくなり、電話やメールにおいて今後の指針の参考となる事例についてなど紹介するにとどまることとなった。

研究の目的

離島における教育の実践例を作り上げるとともに、離島の子どもたちへの教育実践を経験することで大学生の教育力の拡充がどのようになされるかを引き続き調査・研究する。

1. 授業の実践

- ①研究班において、これまでの石垣島（しらほサンゴ村、海星小学校）における授業実践を振り返り、各主体（NPO夏花、海星小学校）との今後の協働について在り方を考える。
- ②授業実践においては、これまでと同様、こども文化学科の学生が授業内容を作成し、模擬授業を経て、授業内容を改善した後、実践の場として石垣島で授業を行う。さらに、離島で展開した授業を応用し、沖縄本島での授業展開を行う（昨年同様コロナの影響もあり、授業や離島への移動制限も考えられたため、本島内の学校の授業に振り返るなど臨機応変に対応する）。
- ③これらの過程（準備―実践―振り返り）において、大学のない離島地域においてどのような大学の教育的関わりが必要とされ、かつ効果的であるかを検証する。

2. しらほサンゴ村の運営に関わるワークショップ

2021年3月にWWFジャパンから白保公民館に移譲されたしらほサンゴ村の今後の活動、運営について、NPO夏花、地域のみなさんとともに他の事例を参考にしながら考えていく。

*ワークショップについては、緊急事態とコロナ感染予防のため実施は取りやめとなった。

実施概要

1.NPO夏花との打ち合わせ

2.沖縄大学こども文化学科ゼミにおける授業内容の検討と作成（7月-11月）

研究班メンバーによる指導で、しらほンゴ村及び海星小学校における授業の内容計画を立て、実践の準備を行う。

3.しらほこどもクラブやまんぐうキャンプの開催（12月）

しらほさんご村にて、WWFジャパン、NPO夏花の協働の下、環境教育と地域文化の体験をテーマにしたハイブリッド授業を行う。

4.沖縄本島内小学校における授業の実施

5.NPO夏花との今後の協力体制についての打ち合わせ（2月）

実施成果

教育面)

昨今、教育現場では、先生たちの負担が大きくなりなかなか教科外の授業ができない現状がある。また、こうした特別授業には予算がつくこともなく、外からの持ち込み授業が唯一の機会となっている学校現場も多い。コロナの影響下、各地で授業の遅延や中断あり、教育の在り方そのものについて考える局面も迎えている。

一方、大学では教員養成の学生はいるものの、授業の実践は教育実習に限られていることも多い。こうした背景から、教育実習とは異なる現場で授業を実践し、その成果を他の学生とわかちあうことは、学生にとって貴重な機会となり、授業を受ける子供達にとっても新しい出会いの場となる。特に大学のない離島地域において大学と地域の教育現場が結びつくことで、新しい形の教育の機会の提供の場が創出できる。

今年度においては、長期に渡る緊急事態宣言を鑑みの「一部対面」と「オンライン」のハイブリッド型「やまんぐうキャンプ」（＝しらほこどもクラブサマーキャンプ）を実施することとなった。その理由として以下が挙げられる。

- ・「やまんぐうキャンプ」は、しらほこどものメインイベントとなっているため、できれば続けて欲しいとのリクエストが現地より寄せられる。

- ・盛口ゼミでは、対面型授業をこれまでメインとしてきたが、今後もコロナ禍の状況や他の自由でオンライン授業が学校で実施されることになることを考慮すると、教員養成過程においてオンライン授業の構想・準備・実践を行うことは、今後、教育現場で役立つことにつながる。

こうした経緯を経て、当初とは大幅に内容を変更し、対面とオンラインツールを取り入れたハイブリッド型の「やまんぐうキャンプ」を実施した。

詳細については、別紙にまとめた。

「Covid-19パンデミック下におけるWWFサンゴ礁保護研究センター（しらほサンゴ村）における環境教育の実践」 盛口 満

地域づくり)

観光庁は「住んでよし訪れて良しの国づくり」を理念に観光を進めてきたが、依然として着地型と言える観光は多くはない。白保ではこうした現状も踏まえ、自然環境の保全を念頭におきながら、地域活動に基点をおいた日曜日や集落散策などの「小さな観光」を実施してきた。今後は、白保公民館のサンゴ村運営委員会、NPO夏花とともにサンゴ村を拠点とした「着地型の小さな観光」を実践していくこととなる。

地域づくりに関しては、夏花担当者、筑紫女学園大学担当者と電話と対面（那覇）による打ち合わせを実施し、しらはサンゴ村の課題と夏花の今後の関わり方について整理を行った。また2022年4月より、しらはサンゴ村の運営主体が、NPO夏花（白保公民館しらはサンゴ村委員会の委託を受けることとなる）と正式決定したため、2022年2月沖縄大学において、担当理事、担当者とともに今後の研究班との関わり方を含めた打ち合わせを行った。

まとめ

2020年、21年の2年間はコロナ禍の影響を受け、特に離島地域への移動制限がかかり、研究班においても様々な変更を余儀なくされた（20年は研究取り下げ）。しかし、コロナ禍でもできることが徐々にわかる中、オンライン会議、ハイブリッドと、これまであまり活用されてこなかったITネットワークを活かした新しい活動のあり方が見えてきた。

これまで盛口ゼミでは、実物標本を用いた体験型、対面型授業を実施してきたが、展開方法によっては、あらかじめビデオツールを作成することで、よりわかりやすい授業を作ることも可能であることが今回わかった。NPO夏花からは、ハイブリッド型の「やまんぐうキャンプ」の実施を経て、今後も年に1回の「やまんぐうキャンプ」に限らず、オンラインを活用した授業や交流を継続的に実施してほしいとのリクエストも上がっている。

また、今年度は、小学生からやまんぐうキャンプに参加していた少年が新入生として沖縄大学国際コミュニケーション学科に入学している。12月に実施されたやまんぐうキャンプでは、現地スタッフと一緒に活動していた方の息子が参加者としてキャンプに参加した。さらに、白保では、これまでのやまんぐうキャンプの参加者が中心になり、地域作りに関わり初めている。

今年で11年目を迎えたしらはこどもクラブとの交流、およびやまんぐうキャンプは、次世代へのバトンを渡す時期にかかってきている。今後は、NPO夏花スタッフ（白保生まれ白保育ちの若者2名が担当）と共に、これまでのノウハウと今後の大学との連携方法を一緒に考えながら、次世代の新しい実施方法を考え、実践していくことが次の大きな課題として見えてきた。

〈実践報告〉

Covid-19 パンデミック下における WWF サンゴ礁保護研究センター (しらほサンゴ村) における環境教育の実践

盛口 満

要約

沖縄大学盛口ゼミでは 2011 年より継続して、WWF サンゴ礁保護研究センター（しらほサンゴ村）において、地域の子どもたちを対象とした環境教育の実践を続けている。2020 年初春より世界各地に広がった Covid-19 パンデミック下において、遠隔と対面のハイブリッド型環境教育実践を行ったので報告をする。

キーワード：WWF 珊サンゴ保護研究センター（しらほサンゴ村）、環境教育、Covid-19

はじめに

沖縄は日本の中でも固有の生態系を保持し、生物多様性の高い地域としても知られる。こうしたことから、2021 年には、沖縄島北部及び西表島が世界自然遺産に登録されたのは耳目に新しい。しかし、その一方、沖縄の自然の保全に関してはさまざまな問題が存在している。地球温暖化といった世界的な環境問題に加え、米軍基地の新建設、および米軍基地からの環境汚染物質の流出など、地域固有の問題がある。また、沖縄島中南部は急速に都市化が進み、かつての伝統的な人と自然の関係は忘れ去られつつあり、そこに暮らす若者、子どもたちは自然体験が圧倒的に不足している。

石垣島・白保はかつて空港建設問題で揺れた集落である。その白保集落前には豊かな珊瑚礁が広がっており、2000 年に WWF がサンゴ礁保護研究センター（愛称：しらほサンゴ村）を開設して今に至っている。なお、しらほサンゴ村は、「地域の自然を保全する主役は地域の人たちである」という方針の元、2001 年に WWF から白保公民館に委譲された。なお、このような方針は委譲に当たる以前から明示されており、委譲に先立ち、すでに 2012 年にはしらほサンゴ村内に NPO 夏花が設立され、地域の自然を保全する諸活動や村づくり活動を担ってきた（沖縄大学地域研究所 2015）。

沖縄大学人文学部こども文化学科・盛口ゼミは、2011 年より、しらほサンゴ村、および NPO 夏花と協働で白保の子どもたちへの環境教育活動の一端に関わってきた。こども文化学科は、2007 年に開設された、定員 50 名の学科である。こども文化学科の理念は「地域に根ざし、地域で活動できる、子どもに関わる人材を広く育成すること」となっている。こど

も文化学科の学生のほとんどは沖縄県内のしかも沖縄島中南部出身者であり、卒業後は県内の小学校教員になることをめざしている。一方、白保のある石垣島には大学がない。このようなこともあり、島の子どもたちの多くは、高校卒業後、島を後にする。地域の子どもたちが、ゆくゆく島に戻り、島の自然を保全してゆくようになるには、島を離れる以前に島の自然や文化を十分に体験、理解することが必要であるとの考えから、盛口ゼミへの環境教育実践への協力が依頼されたわけである。また、この環境教育実践は、県内で小学校教員をめざす学生にとっても、離島の自然を体験し、また子どもたちへの環境教育を実践してみる貴重な機会となっている。

2011年以降、毎年9月の大学の夏季休暇期間の土日を利用し、白保で子どもたちとキャンプ（やまぐうキャンプ）を実施してきた。このキャンプの日程の中で、刺し網漁の体験や、海遊びといった自然体験に加え、盛口ゼミの学生たちが島の自然・文化に関わる授業を2～3コマ実践するというのが恒例となっている。参加するのは、NPO 夏花が呼びかけ集めた、白保の小学校4年～中学2年生の子どもたちである。

ところが2020年初春よりCovid-19パンデミックが世界的に広がった。このため2020年度は、日程を設定し、学生たちによる授業案などもすべて準備したのだが、キャンプは中止せざるを得なくなった。2021年度においても、沖縄県内は5月の連休明けより9月までという長期にわたり緊急事態宣言が発令されたままという厳しい状況が続いた。このため、当初10月に予定していたキャンプは中止となった。しかし、NPO 夏花と協議の結果、いざという場合は中止、または遠隔での実施も視野に入れ、12月に再度の日程を設定して、プログラムを執り行うこととなった。本報告は、Covid-19パンデミック下において、遠隔と対面のハイブリッド型による環境教育実践例の報告である。

1・実践報告一日程

2021年度の盛口ゼミ（こども文化学科3年8名 沖縄島出身5名、宮古島出身3名）では、NPO 夏花と相談の元、9月または10月の土日にやまぐうキャンプを行うという予定を立て準備を始めることにした。しかし、5月以降のCovid-19の蔓延状況から、9月の実施をあきらめ、10月の土日に日程を設定、その後、10月も感染状況の明らかな改善が見込めないということで、さらなる延期を決定し、結局のところ12月25日土曜日、一日だけの日程で授業と交流の場を設けることとなった。

直前まで感染状況が読めないということもあり、いざとなった場合は遠隔での実施も見込む必要があった。また、感染状況が緩和されていた場合であっても、リスク軽減の面から、現地へ行く人数は最低限に絞ることとした。現実問題として、例年は大学からのゼミ旅行費を学生たちの旅費補助にあてていたが、Covid-19パンデミック下ではゼミ旅行費の補助も中止されていたため、全員分の旅費の補助を見込めないということもあった。そのため、6名が大学から遠隔での授業、交流を行い（遠隔班）、2名の学生と著者が白保に行くこととした（対面班）。

当日の日程（1～5のプログラムは午後1時～4時の間に実施）は以下のようであり、この日程にあわせ、対面班は日帰りで石垣島と那覇を往復して主にワークショップを担当し、遠隔班は沖縄大学アネックス共創館から授業の配信をおこなった。

- 0・会場設営、接続テスト
- 1・ゼミおよびメンバー紹介（動画による紹介も含む）
- 2・授業とワークショップその1
- 3・授業とワークショップその2
- 4・交流（クリスマスにちなんだビンゴゲーム）
- 5・まとめ（感想発表）など
- 6・現地反省会

2・実践報告―授業とワークショップ

盛口ゼミ3年生に対しては4月の授業開始にあたり、これまでの白保での授業実践（沖縄大学地域研究所 2015、盛口 2018 など）について説明を行った。先に少しふれたように、こども文化学科の学生は沖縄島中南部出身者が多く、石垣島を訪れたことがない学生も少なくない。そのような学生が白保の子どもたちに、白保や石垣の自然や文化についての授業をするというのは、一見、困難なことのように思える。しかし、ゼミの中で「石垣島やサンゴ、海といったことをキーワードとして、自分なりに授業を考えるように」という課題を出すと、毎年、学生たちはそれぞれに個性的な授業案を提出する。むろん、そのままでは実践するのは難しいので、個々の学生の考えた授業案をゼミ内で検討し、2つまたは3つの授業案にセレクトしなおして実践の場に望むのである。

この数年の授業実践例は以下のようになる。

- ・16年度「サンゴの形」「海岸の砂を使った砂絵づくり」
- ・17年度「サンゴの分類」「八重山の歴史」
- ・18年度「台風」「サツマイモの歴史と郷土料理」「漂着物から楽器を作る」
- ・19年度「虫とカニのからだ」「パイナップルの観察」「砂くらべと砂時計づくり」
- ・20年度「食べられる野草」「紫外線と生き物」「石灰岩と水」

なお、20年度は上記のようなテーマで授業案を作成したものの、Covid-19のために実施できなかったものである。

上記授業案をみてわかるように、「砂絵づくり」や「楽器作り」のように、ワークショップを組み込んだプログラムが散見できる。テーマを見ただけではそれとわからない授業であっても、実物標本を見せたり、絵を描いてもらったり、実験を組み込んだりと、いずれも何らかの体験を含んだ授業となっている。これはキャンプのおりに行う授業なので、何より

楽しんでもらいたいと思っているからである。また、参加する子どもたちは小学4年～中学2年と幅広い学年にまたがっているため、学年による知識差が生じない授業内容とするためという面もある。そして、「環境を学ぶ」という身構えなしに、自然と地域の自然や文化に興味を持つきっかけをつくってほしいという思いがあることが一番の理由である。

2021年度においても、このような先行例の紹介をおこなったのち、各自に興味ある授業テーマの設定を課題としたところ「クラゲの一生」「天気」「貝」「バイオミネラリゼーション」「チョウとガの違い」といった、様々なテーマが提出された。このテーマにそって、各自で考えた内容による模擬授業を発表し、その授業を盛口ゼミの4年生（前年度、白保の授業案を作成したメンバー）も含めて相互評価を行い、3つのテーマに絞った。結果は、「チョウとガ」「貝」「クラゲの一生」というものであり、このテーマに肉付けを行い実際の授業案を練り上げていくこととした。

ところが、当初予定していた、学生たち全員が参加した1泊2日のキャンプでの授業実践が不可能であることがはっきりし、半日のみ、しかも遠隔を中心とした授業実践をすることとなり、当初の授業案を大幅に変更することが余儀なくされた。また、遠隔の授業だけでは、子どもたちの満足度が下がることが予測され、遠隔授業に対面によるワークショップも組み込んだハイブリッド型の授業実践を試みることにした。

結果、作り上げた授業案は次のようなものである。

P・・・バワポを利用した遠隔授業

D・・・動画の配信

T・・・対面でのやりとり

W・・・ワークショップ

授業①「硬い生き物 柔らかい生き物」

- 1・動物の骨を見て何の動物かをあてる (T)
- 2・硬い「骨」を持つ動物はいろいろいる (P)
- 3・海の中には体の柔らかい動物もいる (P)
- 4・クラゲの赤ちゃんの姿を予想して絵に描く (W)
- 5・クラゲの一生の紹介 (D)
- 6・クラゲとサンゴは同じ仲間 (P)
- 7・貝の仲間にも殻がないものがある (P)
- 8・体の硬い部分は化石になって残ることがある (P)
- 9・アンモナイトの化石のレプリカの作り方 (D)
- 10・アンモナイトの化石のレプリカ作り (W)

授業②「チョウとガ」

- 11・子どもたちとやりとりしながら、好きな虫を聞く (T)

- 1 2・石垣島の虫を紹介する。(P)
- 1 3・種類の多い生き物のグループは何？(T)
- 1 4・虫の種類が多いわけ(P)
- 1 5・虫の天敵(P)
- 1 6・鱗粉のあるチョウはクモの網につかまらない(D)
- 1 7・鱗粉転写標本の作り方(D)
- 1 8・鱗粉転写標本をつくる(W)

学生たちは日ごろ教員養成に関する授業を受けているとはいえ、実際の子どもたちを相手とした授業やワークショップに慣れているわけではない。加えて、遠隔での授業実践という事態を迎えて、正直、どのようなことになるのか不安があった。が、学生たちの工夫、対応は著者の予想を超えたものであった。例えば子どもたちが飽きないようにと、クラゲの一生(5)やチョウがクモの巣にかからないわけ(16)を、劇仕立ての動画にして(それもおもしろく)、授業者の話がつづくといった一本調子の授業にならないような工夫をしていたのである。また、ワークショップに取り掛かる前にも、ワークショップの手順をやはり動画にして配信し(9)(17)、子どもたちのモチベーションを高めていた。また、この動画には、失敗事例の紹介なども含めるなどの細やかな気配りもなされていた。

沖縄大学アネックス共創館で実施した遠隔の授業においては、パワポを手許のパソコンから操作するとともに、その様子をカメラで配信した。しらほサング村の会場では、沖縄大学から送られてくる映像をスクリーンに投影すると同時に、会場全体の様子をパソコンのカメラで映し、沖縄大学へ配信、また子どもの様子(子どもの画像、子どもの発言内容)は学生のスマホを活用して、遠隔担当の学生へ通信した。

なお、対面でのやりとり、ワークショップに使用するものとして、以下のものを準備し、当日、白保まで対面班が運んだ。

頭骨標本(リス、タヌキ、ワニ)

化石レプリカ用(アンモナイトの化石6個、油粘土人数分、プラスチックコップ人数分、割りばし、石膏人数分、画用紙、)

鱗粉転写用(チョウの翅人数分、紙人数分、ロウ人数分、スプーン人数分、クリアファイル人数分)

そのほか(紙、交流会のビンゴ大会用賞品)

3・結果

幸い、2021年12月は県内の感染者数が一時的に減少・安定しており、予定通り2名の学生と著者が白保に飛ぶことが出来た。一方、プログラムの実施日を土曜日に設定し、それがクリスマスと重なってしまったため、例年参加していた小学校の高学年、中学生といった、やまんぐうキャンプの対象者の子どもたちの参加が少なくなってしまった。そのため急遽、

地域の学童に通う小学校低学年の子どもたちを呼び集めての授業実践となった（当日参加したのは、小学校高学年以上が4名、低学年が7名）。授業案自体は低学年を想定して考えられたものではなかった。また低学年の子どもたちにとって、このプログラムに参加するのは初めてであり、プログラム冒頭時は騒然とするような雰囲気も見受けられた。ところが授業者や対面班の学生の、子どもたちへのていねいな声掛けや、プログラムの内容自体が徐々に子どもたちをプログラムに引き付け、結局、飽きることなく3時間のプログラムに参加する子どもたちの姿をみることができた。

プログラムの終了時に、子どもたちに感想を聞いたところ、予想以上に多くの子どもたちが手をあげ、感想を口にしてくれた。中でも「最初は気乗りしなかったけど、とてもおもしろかった」といった感想を、低学年の子どもが口にしてくれたのが印象深かった。

今回のプログラムの内容が、すぐに子どもたちの地域や環境への意識を変えるとは思はない。しかし、地域の自然・文化に興味を持つ、あらたな何かのきっかけになるのではないか。また、一回のプログラムだけでははっきりしないが、プログラムを継続する中で、なにかが生み出されていくものがあるのではないかとも思う。

プログラム終了後の反省会の中で、NPO 夏花のスタッフからは、「このような形で実施ができて本当によかった。つながりが確保できた。それに遠隔というあらたな手だてをもつことで、今後、もっとプログラムに幅をもたせることができるかもしれない」という声をかけていただいた。

Covid-19 のパンデミックにより、盛口ゼミでも従来通りのフィールドワークやワークショップが実施できなくなっている。そのような中、こうした形で白保のプログラムを実施することが出来たのは大変貴重だった。また、このような状況下であるからこそ、あたらしい挑戦ができたこともあると思う。この実践をまた次につなげていくこととしたい。

さいごに

2021 年度の沖縄大学の入学者の一人に、山んぐうキャンプに長年参加してくれていた男子学生がおり、彼は入学式の後、わざわざ著者のところへ挨拶をしにきてくれた。しらほサンゴ村を会場とした、やまんぐうキャンプでの環境教育の実践の試みは、当初は思ってもいなかったことであるが、すでに10年を超える長期的な取り組みとなっている。実は今回の低学年の子どもの中に、一人、2011年のプログラム開始時に強力なサポートを行ってくれた地域の青年の長男がいることに、プログラムの途中で気づくことが出来、このことからこのプログラムが、思っていた以上に長期的に継続されていることを自覚することになった。この子らが成長していく過程を今後、プログラムの中で見ていくことが出来たら望外の喜びであると思っている。

謝辞

当日は、アネックス共創館に地域研究所特別研究員・後藤亜樹さんが学生たちの授業配信

のサポートを行った。また、地域研究所職員の方々のほか、通信環境に手間取ったためマルチメディア研究センターの職員の方にもお世話となった。白保においてはNPO 夏花の山口美樹さんに会場設営、運営、旅費の助成の手続き等々で大きなお世話になった。記して感謝したい。

引用文献

- 沖縄大学地域研究所 石垣島白保における環境保全および地域社会維持に関する共同研究
班・盛口ゼミ 2015 「石垣島白保における環境学習の実践・暮らしと文化の調査について
の5年間のとりくみ」 沖縄大学地域研究所
- 盛口満 2018 「2018年度・石垣島における教育実践（盛口ゼミ）の記録」 『こども文
化学科紀要』 5:21-41



しらほこどもクラブ開催！

今年はオンラインと先生たちとのハイブリッド！？



やまんぐうクリスマス会 げっちょ先生と沖大生がやってくる！

2021年12月25日 土曜日

13時から16時まで

しらほサンゴ村

13時から 虫の体の不思議（オンライン）

14時から 生物の作る石（化石を作るよ！）

15時から クリスマスビンゴ大会！

ビンゴ大会は、賞品ももらえるよ！

*緊急事態宣言などが出た場合はオンラインのみになります

